

さいたま市文化財時報

かや 榎りぼーと

第58号

さいたま市指定史跡「藤橋の六部堂」



▲整備終了後の市指定史跡・藤橋の六部堂

「ゆく川の流は絶えずして、しかも
もとの水にあらず」とは、鴨長明による
言わずと知れた『方丈記』(鎌倉時代)の
有名な冒頭です。人の世の儚さや無常を
つづった名文ですが、歴史は絶えず戦乱
や天災により人々が疲弊し、復興する姿
を見届けてきました。過去と現在とでは、
無常の感覚も少し異なるかもしれませんが、
この世の全てのものが常に変わりゆく
定めを持つと理解するならば、果たして、
過去から現在まで、永い年月変わらない
ものは無いものか、ゆく川の流を追っ
てみたいと思います。

●藤橋の六部堂

さいたま市西部を南北に流れゆく鴨川は、大宮台地を刻み、西区、大宮区、桜区へ流れ、川に沿うように多くの古墳や寺社仏閣が連なり、古くからこの地に生きた人々の歴史を刻みこんでいます。鴨川には、現在、多くの橋が架けられていますが、その一つ「藤橋」は、大宮区三橋4丁目と西区植田谷本を東西に跨ぎ、周囲は、西区、大宮区、中央区、桜区と4区の境が接し、現在も多くの市民が行き交う橋です。藤橋の西の袂に、「六部堂」と呼ばれる祠堂があり、敷地内には、旧石橋の石材の一部が堂前に敷かれ、石橋供養塔等を含めて、市の史跡「藤橋の六部堂」(西区大字植田谷本66-2)となっています。

●行者小平次の伝説

藤橋と六部堂については、古くからこんな伝説がありました。

「江戸時代、寛政年間(1789-1801)の初め、小平次と言う旅の行者が、鴨川を渡ろうと藤橋を通りかかったところ、藤橋は、その名の通り、藤の蔓を編んで渡した粗末な吊り橋であった。洪水のたびに橋は流され、人が溺れることもあり、また、牛や馬も通れない不便な橋に村人は困り果てていた。小平次は、村人のために丈夫な橋に架け替えたいと考え、近隣の村々を托鉢し、寄付を募った。ところが、お金が十分集まったところ、小平次は突如姿を消してしまう。多くの村人は小平次に騙されたと後悔した。しばらくして、小平次は再び姿を現し、伊豆の石切場で石を買い、自分で切り出し、羽根倉河岸(桜区大字下大久保)まで5隻の船に積んでき

たので、運搬を手伝ってほしいと言う。村人は大喜びし、小平次の指揮のもと、村人も工を手伝い、寛政8年(1796)3月に立派な石橋が完成した。名前はそのまま藤橋と名付けられ、石橋の完成を見届けると、小平次は再び姿を消してしまった。村人は、小平次を呼び戻そうと、小平次が度々口にしていた丹後国宮津生まれ(現在の京都府)という言葉に頼りに人を向かわせた。そこで聞いた話には、昔、石屋の小平次は、工作中に誤って石を兄の上に落してしまい、死なせてしまった。その罪を償い、兄を供養するため、※六部(下記参照)となって旅に出たが、行方は誰も知らないとのことだった。村人は、行者小平次の徳を後世に残すため、祠堂を建て、小平次の像を安置し、後に六部堂と呼ばれるようになった」と言うもので、大宮市史第5巻(民俗・文化財編)にも伝説として紹介されています。

●石橋の建立と小平次の足跡

昭和45年、青木忠雄氏(元さいたま市文化財保護審議会委員)等の調査で、「石橋建立^{かんげ}勸化帳」「石橋建立勸化帳(写)」「石橋建立諸^{ひかえ}勸化扣帳」の3点からなる**藤橋建立関係資料**(市指定有形文化財・埼玉県立文書館保管)の解読が進み、小平次が実在の人物であること、また石橋完成後もこの地に留まった可能性が高いことが判明しました。勸化とは、建造物建立のため寄付を募^{つの}ることを意味します。

願主小平次と表紙に記された「石橋建立勸化帳」2枚目には、勸化記として、寛政5年(1793)8月吉日、小平次が石橋造営のため寄付を募るに至った想いが記されています。「私は藤橋に心頭を悩ます村人のため石橋を建立しようと発願したが、自分や地元の村の力だけでは難しい。もっとより多くの村の方に助けを得て、一日も早く石橋を完成させたい。そうすれば、『二世安楽を円満せしめ給はん』、我々とその先の未来も人々皆が幸せになれるはずだ」と結ばれており、小平次の強い願いが伝わるものです。

「勸化帳」3枚目以降には勸化高が記されており、六部堂敷地内の助力村々の銘がある台石に刻まれた村々と合わせると、石橋建立に際して、90ヶ宿村から寄付を受けたとされます。その他、同敷地内にある石橋供養塔には「寛政八丙辰三月吉日」「願主 丹後国宮津下岩滝組 上沼邑行者 小平次」の名と共に、地元植田谷本村、側海斗村の世話人を始め、この地からやや離れた三室村(現緑区)や大宮宿、白幡村(現南区)等有力者の名前や石橋建立に携わった江戸神田の石工や奈良瀬戸(現北区)の大工の名前が刻まれており、多くの人々が石橋建立に協力したことが分かります。寛政8年(1796)、石橋が完成した時、小平次や村人はどんな表情を浮かべたことでしょうか。

伝説では、石橋完成後に姿を消した小平次ですが、六部堂の近くの古刹^{こさつ}、林光寺の過去帳に、「文化二年(1805)六月二十九日」「頼賢信士」と記録があり、また六部堂に安置された小平次像の背銘には「文化二乙丑天六月二十九日 頼賢信士 生国丹後俗名小平次」と刻まれています。戒名と没年月日が一致したことで、石橋完成後も、小平次はこの地に留まり生涯を過ごした可能性が高くなりました。(参考文献:大宮市文化財調査報告第5集)

小平次は、石橋完成後、藤橋の袂に草庵を造り、托鉢^{たくはつ}を続けて薬師堂を建造した後、病を患い、村人の庇護のもと療養を続け、薬師堂の中で亡くなったと言われます。その際、村人は、小平次を弔うため薬師堂の敷地に祠堂を建て、行者小平次像をこれに納め、その祠堂は後に六部堂と呼ばれるようになったようです。



▲六部堂敷地内・寛政8年銘
「石橋供養塔」

●六部とは？

六部とは、六十六部の略称で、廻^{かいこく}国行者とも言われます。主に、上下鼠色の服装に身を固め、鉦を腰に下げ、手に鈴を振って笠をかぶり、仏像を入れた厨子を背負う者もいました。六部の起源は、一説には、鎌倉幕府の有力者の前世が66国を廻^{かいこく}国した行者であり、その末裔であると信じた人々が、六部となり全国を巡礼するようになったと言われます。全国66国の霊場を廻り、法華経の經典を納経し、その足跡として全国各地に、石材の供養塔が見られます。供養塔は人々の幸せや旅の安全を祈念したものであり、「奉納大乘妙典」、「六十六部」等と刻まれています。江戸時代初期は、庶民とは異なり、巡礼を目的とする六部は、比較的国内を移動し易かったようですが、逆に密偵を厳しく警戒した藩では、六部の入国を厳しく制限した記録も見られます。六部

には病弱の者も多く志半ばで行き倒れる者、現世での宿命を受け止め贖罪として人々を救うため故郷を後にした者も多くいたのかもしれませんが。

なお、北区日進2丁目の地藏堂には、藤橋勸化帳の一年前の寛政4年(1792)銘の「六十六部供養塔」があり、「丹後宮津領岩瀧組之内菅河村 願主小平治」と刻まれています。この菅河村が、小平次の出身地であるとされ、現在の京都府京丹後市弥栄町須川が有力視されています。日進町には、加村往還と呼ばれ与野道を中継し羽根倉を結ぶ鎌倉街道がありました。六部堂近辺もまた、源頼朝を支えた鎌倉幕府の実力者、足立遠元が館を構えた地であると言われ、六部堂前を蛇行する道も鎌倉へと繋がる街道であったと伝わります。石橋建立にあたり、小平次は托鉢の為、周辺各地を毎日往来したことでしょう。小平次が何を想い、何故この地に辿り着いたのか、鴨川のせせらぎに耳を澄まし、その辿った道筋に思い巡らしてみるのが楽しいかもしれません。



行者小平次像(六部堂内)▲

●小平次の精神は今もなお…

昭和の初め、新たな小平次出現を願い、当時の植水小学校校長は、私財を投じて六部堂を再建しました。昭和11年には、小平次等が建立した石橋は、洪水対策のための河川改修と共にコンクリート橋に替えられ、石材は藤橋の西にあった供養塔の側に積み上げられました。昭和18年1月、植水村役場は、道を挟んだ現在の六部堂の位置に新たな祠堂を建て、旧石橋の資材を積みあげた石塚、石橋供養塔等の石碑を集め整備を行いました。昭和52年には、小平次事跡顕彰保存会により、祠堂の修復とともに旧石材の一部を堂前に敷石し旧の藤橋の姿(幅は石橋当時と同じ約2.3m、長さは当時の4分の1の約2.1m)が復元されました。史跡「藤橋の六部堂」の原型が整い、今日まで地域の人々に大切にされております。

なお、藤橋は、平成4年に架け替えられ、小平次の石橋から数えて三代目となりました。小平次の命日である6月29日には、現在も、行者小平次事跡顕彰保存会をはじめとする多くの人々が集まり、小平次の顕彰祭が行われています。藤橋は、現在も多くの人々の交流を支え、世代は代わってもゆく川の流れは絶えず、小平次の精神は、過去から未来を結ぶ架け橋となり、現在を生きる人々の心の中に受け継がれています。

●六部堂の整備保存

平成23年3月11日、東日本大震災により祠堂の屋根が破損し、また、堂自体の劣化もあり、改修が必要となったため、市では平成27年1月から3月に修繕を実施しました。

まず、六部堂を半解体のうえ各部材を調査し、破損して補修が不可能な部材があることを確認し、部材の復元を行いました。修繕に際しては、壁、屋根、野地板、軸組みの順で解体を行っています。解体時、瓦や壁は、仮組みし易いよう番付をおこない、その番付に従って仮組みをし、材の腐食や損傷、狂いなどを再確認し、建物の歪みも修正しました。本格的な木部の工事では、劣化や狂いが著しい材は取り換え、根継や矧木、埋木といった腐食部の継ぎ足し後、古色塗を施し、保存に支障がない部材は再利用しました。また、ホゾ、仕口、継手など木材が接合する部分の復元を行った後、組み立てを行いました。屋根は、鬼板など特殊な材は再利用、他の瓦は新調し、野地板に防水材を張り瓦棧で止めた後、瓦を敷き詰めています。内装は漆喰塗を行い、小平次像を納める格子戸を取り付け、完了しました。

TOPICS

●市指定無形民俗文化財「深作ささら獅子舞」の復活

平成26年度は、後継者不足で、公開が見送られた深作ささら獅子舞ですが、平成27年8月22日(土)深作氷川神社において2年ぶりに公開が行われ、門人衆や地元の方々の方々の尽力により、見事復活を果たしました。後庭のみの公開となりましたが、地元の方々が早朝から力を合わせて土俵の上に大きな天幕を掲げ、晴れ舞台を整えました。三獅子は舞台の上で息の合った軽快な舞を繰り広げ、また天狗は滑稽な悪戯を繰り返し、集まった多くの観客を惹きつけました。しばしの眠りから目覚めた獅子ですが、市民の誇りとして愛される舞が永く続きますよう期待します。

●最新出土品展 開催中 見学無料

最新の発掘調査の成果を、出土品等で紹介しています。さいたま市立博物館(9月8日(火)～9月23日(水))での展示を終え、今後は下記の日程で市内を巡回します(会場によって展示資料が若干変わります)。

会 場	期 間	時 間
ステラタウン 3階連絡通路 (北区宮原町1-854-1)	9月28日(月)～10月12日(月)	10時～21時
サウスピア 3階 展示スペース (武蔵浦和図書館前) (南区別所7-20-1)	10月13日(火)～10月25日(日)	9時～20時(火～金) 9時～18時(土・日・祝) (毎週月曜日休館)
春野図書館 2階通路 (見沼区春野2-12-1)	11月3日(火)～11月24日(火)	9時～20時(火～金) 9時～18時(土・日・祝) (毎週月曜日休館)11月23日は祝日のため開館
浦和区役所 1階ロビー (浦和区常盤6-4-4)	11月29日(日)～12月11日(金)	8時30分～17時15分 (土日祝は閉庁、11月29日(日)は開庁日)

さいたま市内指定無形民俗文化財の公開カレンダー(平成27年10月～平成28年1月)

天候などにより日程が変更することもありますので、詳しくはさいたま市の Web ページをご覧ください。文化財保護課(☎829-1723)までお問合せください。見学無料。

名 称	日 時 ・ 場 所 ・ 内 容
田島の獅子舞(市指定)	10月4日(日) ①15時～ 田島氷川社(桜区田島4-12-1) ②16時～ 四谷稻荷社(南区四谷3-7-34) 三頭の獅子が笛の音にあわせ、太鼓を打ちながら優美に舞います。
南部領辻の獅子舞(市指定)	10月18日(日) ①13時～、②15時～ 鷲神社(緑区大字南部領辻2914)別名「竜頭の舞」、三頭の獅子による勇壮な獅子舞です。
岩槻の古式土俵入り (釣上地区)(国指定)	10月18日(日)13時30分～ 神明社(岩槻区大字釣上220) 子どもたちが古くから伝わる土俵入りの型を披露します。
一山神社冬至祭(市指定)	12月22日(火)14時～ 一山神社(中央区本町東4-10-14) 一年間の穢れを祓い、新年の無病息災を願う火渡りを行います。
指扇の餅搗き踊り(市指定)	1月1日(祝)0時～ 五味貝戸自治会館(西区指扇291) 曲芸風に杵を扱う「曲搗き」などを披露します。
日進餅つき踊り(市指定)	1月1日(祝)0時～ 日進神社(北区日進町2-1194) 年明けの鐘とともに始まる餅つき踊りです。